

世界遺産トロイアの観光歴史学的考察

藤井 信行*

Troy and the Atlantis Legend

Nobuyuki FUJII

要 旨

観光学の中の一分野として「観光歴史学」の設立を試みた。私たちの時代に残る歴史的財産を、確実に次の世代に残していくための学問的な体系化である。その際、「観光歴史学」に2つの目的を設定した。1つは、そうした歴史的財産を観光資源として再生することであり、いまひとつはその保存と活用を考えることである。保存・活用という問題はマネジメントの問題であり、もちろん歴史学にそんな分野はない。ここに歴史学にはない「観光歴史学」の存在意義がある。小論は、まず観光資源としての再生という点に関して、ケーススタディとして世界遺産トロイアの遺跡をとりあげ、その観光歴史学的考察を試みたものである。

キーワード：観光歴史学、トロイア、アトランティス、サントリーニ

1. 「観光歴史学」の創設

①時代の要請

「観光歴史学」という名を初めて耳にする人も多いと思われる。それも当然で、歴史学の分野にも「観光歴史学」という分野はないし、観光学においても未だ体系化された研究の積み重ねがあるわけでもない。ただそれが「観光学」と「歴史学」を融合させたものであることは、その名称から推測されよう。

では今、この二つが融合しなければならない必要性とは何なのか？あるいは現代における「観光歴史学」の必然性とは何なのであろうか？それは、現代の私たちが（そして未来の私た

*助教授 観光歴史学

ちも同様に) 私たちの時代に残る歴史的財産を確実に維持・保存し、それらを次の時代にも残していかなければならないということである。微力ながら、「観光歴史学」はそのための体系化された理論や原則などの確立を意図するものである。

ただし「観光歴史学」は、歴史学の方法論を使って、観光学の中に一つの分野を確立しようとするものであるから、観光学の中では、既存の歴史学という学問領域からのアプローチである点において、さらにまた「人」よりも「物」を主な考察の対象にする点において、旧来の観光学の研究方法与大きく変わるものではない。また新たに観光学全体を体系化しようとする試みでもない。ただその体系化の一助となってくれば良いと考えている。

②「観光歴史学」の目的

筆者は「観光歴史学」に大きな二つの目的を設定している。

- i) 過去の観光・旅行現象や現代に残る建造物や遺跡などの観光資源を歴史学的な考察に基づいて、その本来の姿や意義などを復元・再構築することである。ここで言う歴史学的考察とは、現代に残された文献や発掘品その他の史・資料などに基づく、いわゆる歴史学の方法論による考察である。そしてそうした現象や歴史遺産が、それぞれの時代・それぞれの社会にあってどのような意味を持ったのかを明らかにする。ただ「観光歴史学」は、考察の対象が主に観光資源であること、さらに考察の資料が歴史学が取り上げ難い分野（たとえば神話など）のものでもアプローチが可能であることに大きな特徴がある。つまり観光資源として再生するために、資源としてのでき得る限り多くの可能性を追求することが観光歴史学の目的であり、この点において歴史的事実のみを積み重ねて論証し解釈していく歴史学とは大きく異なるのである。
- ii) 現代に残るこうした観光資源をこれからどのように残していくのか？ を考えることである。つまりこれは「保存」の問題である。言うまでもなく、私たちが旅行や観光をとおして見ることができる〈過去—たとえば中世や古代—〉は、私たちが考える中世や古代であって、それがそのまま中世や古代そのものではない。従って、そうした〈過去〉が現在どのような形で残されているのか？ また残されてきたのか？ を考えることも、〈どのように残していくのか？〉を考える上で必要となろう。そしてこの「保存」の問題は観光歴史学においては同時に「活用」の問題でもある。特にその保存を公金に頼っている施設などは、これから行政との関係や経営といった問題がより重要な問題となつてこよう。これはすなわち「マネジメント」の問題であり、「観光学」がこれまで多くの研究事例を積み重ねてきた分野でもある。

小論は、この2つの目的のうち第一点に関して実証的な考察を試みたものである。歴史的財産としてのトロイアを観光資源として再生させるために、トロイアがもつ可能性を観光歴史的に考察した。なお第二点目に関しては別稿を用意している。

2. トロイアの観光歴史的考察

① ホメロスのトロイア

古代都市トロイアの遺跡は、1998年ユネスコ世界遺産（文化遺産）に登録された。消滅した文化的伝統・文明に関する独特な証拠を示すものとしての価値が認められたことによるものであった。トロイアとは、古代ギリシャ時代の有名な詩人ホメロスの叙事詩『イーリアス』の中でトロイ戦争の舞台として登場する古代都市である。トロイの木馬や勇者アキレスの話とともに後世に伝えられてきた。

『イーリアス』はもともと文字ではなく口承で伝えられてきたもので、日本での琵琶法師と『平家物語』の関係を思い起こせば良いかもしれない。ホメロスがこれを紀元前800年頃に文章化し、今日、私たちが見ることの出来るような形にまとめたと言われている。ホメロスについては詳しいことはわかっていない。これまでホメロスとは個人名とされてきたが、そうではなく単に吟遊詩人を意味する一般名詞ではないか？ という昨今の研究もある。

この物語は、トロイアの王子パリスがスパルタの王妃ヘレネをトロイアへ連れ去ったことから始まる。⁽¹⁾王妃を奪われたスパルタ王メネラーオスは激怒し、兄のミュケナイ（ミケーネ）

遺跡入口にある木馬の模型（絵葉書の写真より）

王アガメムノンに助力を求めた。アガメムノンはギリシャ連合軍を組織しトロイアの攻略に向かうが、しかし海の神ポセイドンによって作られたトロイアの城壁は難攻不落で、10年間戦っても陥落することはなかった。この10年間の戦いの中にアキレスが登場する。アキレス腱のアキレスである。また「トロイの木馬」の伝説も登場する。

木馬の伝説そのものは『イーリアス』の中には無く、後の古代ローマ時代の詩人ウェルギリウスによって書かれたものである。⁽²⁾ギリシャ連合軍はトロイア征服を諦め、その印として巨大な木馬を残し撤退したと見せかけた。これはホメロスのもう一つの著作『オデュッセイア』の主人公オデュッセウスの策略として描かれている。ギリシャ兵が消え失せ、木馬が残されているのを見て勝利を確信したトロイアの戦士たちは、木馬を場内に引き入れ祝宴に酔った。「町は眠りとぶどう酒の中にうもれた」（ウェルギリウス）のであった。市民たちが寝静まったころ、木馬の中に潜んでいたオデュッセウスや他のギリシャ兵がロープを伝って下り、見張りを殺し城門を開けた。ギリシャ軍が急襲し、ここにトロイアはあえなく陥落したのであった。

ホメロスの叙事詩によると、トロイアはエーゲ海とマルマラ海を結ぶダーダネルス海峡のアジア側に位置していて、いつも強い風が吹いていた。おそらく中継港の役割を果たしていたであろうと想像されるが、食料や水を供給し航海情報を提供していたと考えられる。同時に商人たちにとっては交易の中継地として重要な都市であったと考えられる。また強い風が吹くという気象条件も、当時の風力と人力にたよる船にとっては不可欠の条件であったろう。こうしてトロイアはダーダネルス海峡の航行や、小アジアの西部沿岸地域から海峡の横断地点までを結

世界遺産トロイアの観光歴史的考察

ぶルトを支配することによって富み栄えていたと想像される。⁽³⁾

スパルタの王妃ヘレネをめぐる物語であるが、実はこの莫大な富を築いていたトロイアの利権を当時ギリシャ最強のミュケナイが強奪しようとした現代で言ういわゆる経済戦争であったとも考えられている。いずれにせよ多くの謎が残る「ホメロスのトロイア」であるが、古代からたくさんの人を魅了し続けた物語であることは確かである。

エーゲ海全図 (*Troia-Traum und Wirklichkeit*, p.51. に加筆)

② シュリーマンとトロイアの遺跡

このトロイアの発掘に情熱を燃やしたのが、ハインリッヒ・シュリーマンであった。彼はホメロスの叙事詩を頼りに発掘を始め、ついに1873年にダーダネルス海峡のアジア側に位置するヒッサリクの丘で財宝を掘り当てた。彼はこれにトロイ戦争時のトロイアの王プリアモスの名をとって、「プリアモスの財宝」と名づけた。その後、このヒッサリクの丘はそれぞれ年代の違う（紀元前30～後1世紀）9つの遺跡が層を成していることが明らかとなり、後年の調査で各層の年代も明らかにされた。⁽⁴⁾下記のとおりである。

第1市（紀元前3000～前2400年頃）

第2市（紀元前2400～前2200年頃）「プリアモスの財宝」が発見された層

第3市（紀元前2200～前2100年頃）

第4市（紀元前2100～前2000年頃）

第5市（紀元前2000～前1700年頃）

トロイア全9層の遺跡（ムスタファ・アシュクン『トロイ神話と史実』[Istanbul, 2004年], pp.8-9. より)

第6市（紀元前1700～前1250年頃）「ホメロスのトロイア」と考えられる層

第7市（紀元前1250～前1000年頃）

第8市（紀元前700～前85年頃）

第9市（紀元前85～後500年頃）

ところが近年の新たな発掘（1983年の考古学者デルプフェルドによる第6市の発掘）や科学技術の発達により、シュリーマンによって発見された財宝はプリアモス王の時代の物ではないことが明らかにされた。この時に発見されたのは実はトロイ戦争よりも1,000年も前のものであった。シュリーマンが財宝を掘り出し、「ホメロスのトロイア」だとした遺構は実は第2市のものであった。とはいうものの、シュリーマンが見つけた第2市は、その財宝が示すとおり当時のエーゲ海周辺の繁栄した状態を物語っている。トロイ戦争よりも1,000年前のトロイアもまた、「ホメロスのトロイア」に相当するだけの繁栄する大都市だったのである。

さて、現在この9つの層の中で「ホメロスのトロイア」にあたると思われるのが第6市である。第6市は青銅器時代後期で、城壁内は200m×120mとそれ以前の町よりも大きく、城壁内には約1,000人、城壁外には約5,000人が居住していたと推測されている。また存続期間が長く、周辺国の陶器などが出土していることから、この時代には各国との交流も盛んだったことがうかがえる。

この第6市は、紀元前1250年頃に滅亡した。城壁や櫓などが人為的に破壊され、ギリシャのミケーネ文明時代の武器が多数発見されたことから、ギリシャ軍との戦いにより滅びたとされている。第7市初期の町が非常に貧弱なのは、第6市時代に貴族階級が皆殺しにされ、生き残った人々が間に合わせの町を造った為だとする説もある。⁵⁾その後、トロイアは、ギリシャ人の植民都市と考えられる第8市、そしてアテナ神殿、音楽堂や議事堂など、比較的良好な状態で残されている遺構に代表されるローマ人の都市である第9市へと引き継がれた。

遺跡は、シュリーマンが自分の考える「ホメロスのトロイア」とその財宝にこだわるあまり、それより新しいと考えた遺構は潰して掘り進められた。そのため第3市～第5市の遺構は現在ほとんど残っていない。しかし、彼の死から1世紀が過ぎた現在でも、シュリーマンとその発掘物語は衰えぬ人気を誇っており、多くの物語や戯曲、オペラなどの題材となっている。現在は小高い丘の上に石造りの城壁跡や劇場跡が残る岩や石だけの遺跡であるが、かつて一度はここが「ホメロスのトロイア」と考えられ、その後も多くの人たちにそう考え続けられてきた。そして1998年には、ユネスコ世界遺産に指定された。

③エーゲ文明・古代ギリシャ文明の時代区分

紀元前30世紀～12世紀までのギリシャを、一般にエーゲ文明の時代と呼んでいる。これは、ギリシャ本土と小アジア半島そして南はクレタ島に囲まれたエーゲ海一帯に栄えた文明の総称である。紀元前30世紀頃から、先進のエジプトから海岸沿いに北上して来た人々が創り上げた文明と考えられており、トロイヤやクレタ島、そしてギリシャ本土ではアガメムノンの黄金のマスクで有名なミュケナイ（ミケーネ）などが私たちの知っているこの時代の代表的なものである。

ところがこのエーゲ文明は、紀元前12世紀末に崩壊する。この時期を境にして、突然、姿を消してしまうのである。エジプトの文献には、この時代に「海の民」と呼ばれる人々の大規模な侵略があったことが記録されている。もちろん「海の民」だけではない。その他の複合的要因、たとえば天災やそれに続く社会危機、あるいは文明としての疲労などが突然の崩壊の要因として挙げられている。⁽⁶⁾そして紀元前8世紀までの以後およそ400年間にわたる「暗黒時代」が始まる。

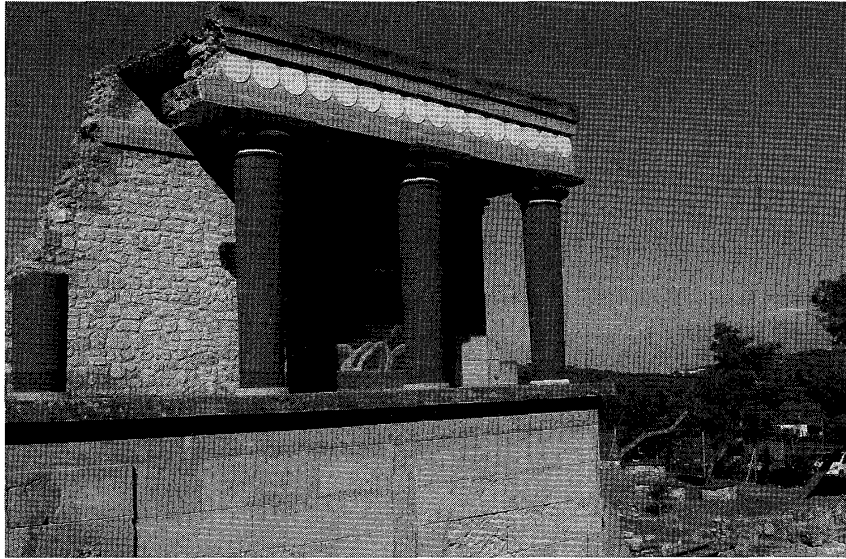
紀元前8世紀から古代ギリシャは都市国家ポリスを中心に繁栄を始めるのだが、紀元前12世紀～8世紀の400年間には多くの人々は未だ集団生活をしておらず、小さな単位の社会で自給自足の生活をしていたと考えられている。小さな社会で自給自足の生活をする限り、人々は文字を使って何かを書き残す必要がなかったので、文字自体が使われなくなったと考えられている。つまり後世の私たちにとっては、この時代について知り得る一切の記録が存在しないのである。私たちがこの時代について知るすべがないという意味で暗黒時代と名づけられたが、この暗黒時代にそれ以前のギリシャの歴史は失われた。文字で書き残されることがなかったので、ギリシャの人々の記憶からも歴史は消えてしまったのである。

ところで、このように紀元前30世紀から12世紀末までのおよそ1,800年余り栄えていたエーゲ文明であるが、BC1628年を境に大きな変化が起った。この年、現在のサントリーニ島で火山の大爆発が起こったのである。当時テラ島と呼ばれていたこの島は、ミノア文明の中心地の一つとして地中海貿易で大いに繁栄していた。テラの爆発はテラ島の都市国家を崩壊した。そしてその大爆発は、おそらくテラ島にとどまらずエーゲ海一帯の都市国家をも襲ったと考えられている。⁽⁷⁾

ところでサントリーニ島が位置するミノア文明圏の最大の都市といえば、クレタ島のクノッソスをあげることができる。すでに紀元前19～18世紀という早い時期に、ここで初期の宮殿の建築が始まっていた。テラの火山爆発の規模から想像してクノッソスもいったん崩壊したものと考えられる。その後、クノッソスは見事に再興し紀元前14世紀ごろにまた繁栄を迎える

エーゲ文明の年表（『天からの洪水』 p.109. に加筆）

が、ここで重要なことはこのテラの大爆発がエーゲ海全域に大津波と火山灰による壊滅的な打撃を与えたと考えられる程の大規模なものだったことである。つまりテラ島爆発以前にクレタを造っていた人々は、爆発とともにほぼ全滅しただろうと想像される。それゆえに爆発の後にクレタ島に上陸し、町を築き都市を築き、そしてそれを支配し繁栄させた人々は、爆発以前にクレタを支配していた人々とは異なる人たちだと考えられる。おそらくギリシャ本土から入っ



クノッソス宮殿

てきた人たちによって新たに支配されたと推測されるが、それは同時にギリシャ本土でミケーネ文明を築き上げた人々と同じ人たちだと考えられるのである。

このことは、クレタやミュケナイで発掘された文字によって解る。クノッソスを発掘したアーサー・エヴァンスがクレタの文字を三段階に分類したが、①初期の象形文字、②草書化された「線文字A」、③これを修正した「線文字B」の三段階である。現在ほぼ解読されているのは「B」のみで、テラの爆発以前のクレタでは「A」が使われていた。当初、「B」は「A」が変化したものと思われていたが、そうではなかった。二つは違う言葉だった。つまりテラの爆発でクレタがほぼ全滅した後、ギリシャ本土からクレタにやってきた人々が今まで自分たちが話していた言葉を「線文字A」の表記法で表した。それがつまり「線文字B」だったのである。⁽⁸⁾そしてこの「B」はクレタだけでなく、最近になってミュケナイをはじめとするギリシャ本土で数多く発見されている。こうしてテラの爆発以後のエーゲ海一帯には、ミュケナイに代表されるギリシャ本土の勢力が大きく拡大していたことが明らかにされた。

④ アトランティス伝説とトロイヤ

i) プラトンのアトランティス伝説とテラ説

「アトランティス」とは、かつて大西洋に存在し、神の怒りによって海中に沈められたと伝えられる島、もしくは大陸のことである。今からおよそ11,000年前に大西洋にアトランティスと呼ばれる大きな島があり、リビアとアジアを合わせたよりも大きかった。高度な文明を



線文字 B の粘土板 (アテネ考古学博物館)

もった人々が住み、同心円状の輪によって構成された丸い島の伝説である。そしてこの島は、大地震と洪水のために一日と一夜のうちに海底に沈んでしまったのであった。⁽⁹⁾この話は、古代ギリシャの哲学者プラトンが紀元前 360 年頃に書いたとされる『ティマオス』と『クリティアス』の中で、エジプトの神官が紀元前 6 世紀にギリシャの政治家ソロンに語ったものとして登場する。これが唯一のアトランティス自体について書かれた文献であり、謎はもちろんここから始まった。

有力視されていたのはこの大西洋説であったが、いまひとつ地中海説がある。プラトンの本には、アトランティスについて様々なことが書かれているが、その場所に関しては「ヘラクレスの柱」の向こう側にあると書かれている。ヘラクレスの柱とは普通、ジブラルタル海峡の 2 つの山のことを指すことから、アトランティスは大西洋にあると考えられてきた。⁽¹⁰⁾またその後にはクノッソスの発掘に関連して、ミノア文明がアトランティス伝説のもとになったとする説も浮上してきた。⁽¹¹⁾この他にもヘラクレスの柱をダーダネルス海峡と解釈することによって、トロイア文明と重ねる説もある。⁽¹²⁾中央・南アメリカという説もある。⁽¹³⁾南極というものもある。⁽¹⁴⁾このように諸説入り乱れ、現在では提唱されているだけでも約 1,700 説にも及ぶ。⁽¹⁵⁾

ギリシャのエーゲ海にサントリーニ島という島がある。夏にはヨーロッパ中からリゾート客

が訪れる有名な島である。昔はテラもしくはティラと呼ばれていたが、エーゲ文明、特にミノア文明の中心地の一つで、地中海貿易で大いに繁栄していた。当初、この島はもとは直径20キロメートルくらいの丸い円錐形の島で、富士山がそのまま島になったような形であり、紀元前1628年の火山爆発で山の上の部分が全部吹っ飛び、そこに直径13～15キロメートル、深さ2キロの大穴が開いて、海面から2～3キロメートルの山の斜面だけがぐるーと残ったと言われていた。このカルデラの外輪山の部分が現在の三日月型の島と2つの小島である。しかしより新しい地質学的調査によるとこの島は噴火の時点ですでに環状島で、その南西部の低い部分をとおしてカルデラは海につながっていたことが明らかになった。⁽¹⁶⁾カルデラの中央部に火口の中の島が海面から顔を出していた。この島が紀元前1628年に火山爆発を起こし、地震と大津波が地中海沿岸地域を襲い、壊滅的な被害を及ぼしたのである。

1967年にギリシャの考古学者マリナトスが、このサントリーニ島のアクロティリで火山の大爆発によって埋もれた古代の都市を発見した。発掘が進むにつれて、この都市は人口2～3万人規模の高度な文明社会であったことがその遺跡から想像された。家屋には上下水道が配備され、しかも上水道に至っては建物に冷水と温水の2つの管がはりめぐらされ、都市インフラの整った高度な文明社会であったことが明らかにされた。室内の壁にはフレスコ画が描かれており、当時の人々の豊かな暮らしぶりが想像される。⁽¹⁷⁾マリナトスは当初、テラの爆発をミノア文明の崩壊（紀元前12世紀）に結びつけようとしたが、残念ながら爆発と崩壊には500年ほどの差があった。⁽¹⁸⁾しかしこの繁栄していた大都市が火山爆発と地震によって1日にして壊滅してしまったことが、アトランティス伝説と結び付けて考えられることになった。アトランティス伝説の舞台はサントリーニ島であったという説が瞬く間に広がった。

さらにテラの大噴火が、その他の研究者の注目を集めるものとなったことにより、アトランティス＝サントリーニ（テラ）説がにわかに真実味を帯びて語られるようになった。2年後の1969年に地質学者のガラノプロスが、アトランティスとサントリーニを結びつけた。もっとも、文献上は19世紀末にあるフランス人がすでに両者を結びつけて考察していたし、⁽¹⁹⁾20世紀の初めにはベルファスト大学の古典学者フロストが、先にも述べたとおりアトランティスはクレタに栄えたミノア文明の名残りだという説を唱えていた。⁽²⁰⁾ガラノプロスはこれを学問的に論じようとした点で、研究史の上で重要な意味を持つ。彼は、プラトンの数字一たとえば年代や面積など一を十分の一にすることを提唱した。解読の段階で数字の単位に誤表記があったというのだ。この考えに立てば、9,000年前ではなく900年前。すると、アトランティスの崩壊は紀元前1500年頃となる。これは当時の考古学の放射性炭素法年とほぼ一致した。さらに彼は、アトランティスの同心円状の輪とサントリーニ島の環状島—つまりカルデラと外輪山



サントリーニ島（外輪山上の街フィラから内海を見る）

一の類似性を指摘した。⁽²¹⁾

イギリスの歴史家ルースもこの年に、プラトンの誤写・誤解釈を指摘しサントリーニ説を補強した。つまり、<リビアとアジアを合わせた…>ではなく、<リビアとアジアの間…>と理解すべきである、と説いたのである。⁽²²⁾これによって、サントリーニの位置が、文献上も論証されることとなった。こうしてアトランティス=サントリーニ説が、急速に浮上してきた。火山が大爆発し、都市が火山灰に埋もれ、島が陥没し、大津波が発生した。こうしたことすべてが、一日と一夜にして海底に没したというアトランティスの滅亡の記録と重ね合わされて考えられた。そして火山の爆発した年を特定することが、すなわちアトランティスの崩壊の年を示すと考えられた。

地球物理学がアトランティス崩壊の年を特定した。カリフォルニアの樹齢5,000年と言われるイガゴヨウマツの年輪や、同じようにアイルランドの樫の埋もれ木にも紀元前1628年の年輪に霜害の痕がある。⁽²³⁾こうしたことが1980年代の終わりになって明らかにされた。さらに1990年代に入ると、グリーンランドの氷の層の調査が行われ、紀元前1645年前後20年の層に火山爆発の痕跡があることがヨーロッパ共同研究チームによって明らかにされた。⁽²⁴⁾つまりこの時期に全地球規模の一大天変地異が発生し、おそらくそれは火山の大爆発で、その結果とてつもなく大きな火山灰の厚い層が地球をぐるりと一周し、一部は数年間滞留していただろうことを物語る。そして、紀元前1628年がその最も可能性の高い年号と見なされている。

また中国にはこの時代を記録している文献がいくつかある。そこに残る天変地異の記録を整

理することによって、紀元前 1628 年という年号を中国史の上で確定できることになる。『竹書紀年』の中に、夏の桀王の 29 年に「太陽が 3 つ並び…、雨が降らず日照りが続き…、寒い夏が訪れ…」と、火山灰などが地上を覆ったことによる天候不順の記録がある。これに相当する出来事は、その他の文献にも記録されている。⁽²⁵⁾

しかしながらこれが地球物理学による科学的な数字であったとしても、どうしても文献資料とは数字が合わない。プラトンによれば、ソロンがエジプトに行ってこの話を聞いたのが紀元前 560 年。いくつか説があって、紀元前 570 年あるいは 590 年という説もある。いずれにしても紀元前 6 世紀前半のことである。それから 900 年前だとすると、紀元前 15 世紀前半ということになる。560 年だとすると紀元前 1460 年、590 年だったとすると紀元前 1490 年となる。1628 年との間には 140～170 年近くの差がある。これは、エジプトの神官が漠然と 9,000 年前とだけ言っていることを考えれば、誤差の許容範囲内の数値と考えて良いのか？ おそらくアトランティス=サントリーニ説を採る限り、この年数の誤差は許容範囲内と考えざるを得ないであろう。様々な分野の科学的データがほぼ等しく紀元前 1628 年という数字を出している以上、それが優先されことになる。

ii) アトランティス伝説とトロイ戦争

私たちが、古代ギリシャの暗黒時代（紀元前 12 世紀～8 世紀）より以前のギリシャの歴史を知る上で、手がかりにしている 2 つの資料が存在する。1 つは古代ギリシャの哲学者プラトンが書いたといわれている『ティマイオス』『クリティアス』の中に出てくる「アトランティス伝説」、そしてもう 1 つは紀元前 800 年頃の作と言われるホメロスの叙事詩『イーリアス』に登場する「トロイ戦争」である。

アトランティスの話は、エジプトの神官が紀元前 6 世紀にギリシャの政治家ソロンに語ったもので、ソロン自身が知らなかった話であるから、それは暗黒時代以前のギリシャについての話ということになる。古代ギリシャでは、文字で書き残すという習慣のなかった暗黒時代の存在によってそれ以前のギリシャの歴史は失われたが、この間の出来事はエジプトで文字によって残されていた。アトランティスの伝説もその一つであったが、アトランティスがギリシャの都市国家と戦って敗れたことが書き記されていた。

そしてこの暗黒時代以前のギリシャがエーゲ文明の時代であることは先に述べたが、このエーゲ文明の時代においてギリシャ本土の都市国家が戦争をして勝利を収めるほどに勢力があった時代はといえば、それは現在の研究水準から言えばミケーネ文明の時代以外には存在しないのである。ここで思い出されるのがトロイ戦争である。この戦争はトロイアの王子パリ

がスパルタ王妃ヘレネを奪ったことから始まるが、アトランティスとこのトロイ戦争の2つの物語に共通する点といえば、それはアトランティスという都市国家とトロイアという都市国家がともに当時、力のあったギリシャ勢力によって滅ぼされてたということである。

一見するとそれぞれ別の時代の出来事だと思われるこの2つの伝説であるが、プラトンはアトランティス伝説をエジプトの神官による9,000年前の話として語っており、9,000年前といえばやっと氷河期が終わった頃の話ということになる。エジプトの文明ですら紀元前3,000年から、せいぜい4,000年頃までしか遡れない。従ってガラノプロスのように9,000年前を900年前と十分の一にして解釈するか、さもなくば太陽暦ではない別の暦による年数と解釈するしかない。ならば太陽暦以外の暦で、当時エジプトに存在していた可能性のある暦で解釈してみると、「月による暦」では9,000年前はおおよそ紀元前13世紀の初頭になる。これはミケーネ文明が繁栄していた時代と一致する。この計算によると、トロイ戦争は13世紀の末、だいたい紀元前1210年頃という数字が出てくる。⁽²⁵⁾

さらにトロイアの9つの層の第6層からはギリシャ軍の武器（矢じり）が多数発見され、この時代にギリシャとの戦争があったことが想像できる。そしてトロイアの第6層は紀元前1700年頃から1250年頃の時代と考えられているのである。つまり、現在、私たちが知っている暗黒時代以前の歴史上の出来事で、たとえそれが伝説や神話の話であったとしても、ギリシャが勝利した大きな戦争といえばそれはトロイ戦争しかない。しかもアトランティスとトロイアの2つの戦争は、ともに紀元前12世紀後半の出来事なのである。トロイ戦争の話は、過去100年、200年間に渡るギリシャ都市国家群とトロイアとの断続的な戦争を10年に凝縮し

た話しだという説もあるが、この断続的な戦争の最後のものがアトランティスの戦争だったのかもしれない。

いずれにせよ、アトランティスとトロイアの戦争が同一のものだったことを証明するには、現在進行中のトロイアの発掘の成果を待つしかない。文献学的には、その可能性が十分に指摘できる2つの戦争の一致だが、具体的に発掘の結果が出れば、いよいよアトランティスはトロイアだったという仮説が現実味をおびてくることになる。

3. まとめ

トロイアに関しては文献上、トロイ戦争に関するものが、唯一の文献資料であった。そして考古学上の成果により、この文献資料に表れたトロイアの過去が復元されつつある。またトロイアを観光歴史学的に考察することにより、いまひとつの文献資料がもうひとつ新たなトロイアの過去を明らかにする可能性を示してくれる。ここに観光資源としてのトロイアの可能性がさらに大きく広がっていくのである。 (完)

注

- (1) ホメーロス (高津訳) 『イーリアス』 (フランクリン・ライブラリー, 1986年) に基づく概説である。
- (2) ウェルギリウス他 『アエネーイス』 (上・下) (岩波文庫, 1976年)。
- (3) Carl Blegen et al., *Troy III: the Sixth Settlement* (2 vols.) (Princeton, 1953), p.17.
- (4) Archäologisches Landesmuseum Baden-Württemberg (ed.) *Troia- Traum und Wirklichkeit* (Stuttgart, 2001), pp347-54.
- (5) Ibid., p: 352.
- (6) エバーハート・ツァンガー 『天からの洪水-アトランティス伝説の解説』 (新潮社, 1997年), 132ページ。
- (7) ワルター・フリードリヒ 『海の中の炎 サントリーニ火山の自然史とアトランティス伝説』 (古今書院, 2002年), 67-81ページ。
- (8) レオナード・コットレル 『エーゲ文明への道』 (原書房, 1992年), 344-66ページ。
- (9) プラトン (種山他訳) 『プラトン全集 12 テイマイオス クリティアス』 (岩波書店, 1981年)
- (10) 今日まで大きな影響力を持つのが, Ignatius Donnelly, *Atlantis: the Antediluvian World* (New York, 1882) である。
- (11) フロストが1909年にタイムズ紙に投稿した「失われた大陸」に始まる。(ピーター・ジェイムス他『古代文明の謎はどこまで解けたか (I)』 [太田出版, 2002年], 48-9ページ)
- (12) ツァンガー前掲書が代表的なものである。
- (13) デイビッド・ジンク (吉田他訳) 『海底大陸アトランティス カリブ海に眠る謎の巨石群』 (白楊社, 1981年)。

世界遺産トロイヤの観光歴史的考察

- (14) ランド&ローズ・フレマス (宇佐訳) 『アトランティスは南極大陸だった』 (学習研究社, 1995 年)。
- (15) 平川陽一他 『アトランティス 失われた帝国の謎』 (コアラブック, 2001 年), 参照。
- (16) フリードリヒ前掲書, 119-46 ページ。
- (17) S. Marinatos, *Excavations at Thera VII* (Athens, 1976)
- (18) Marinatos, 'The Volcanic Destruction of Minoan Crete,' *Antiquity* 13 (1939), pp.425-39.
- (19) L. Figuier, *La Terre et les Mers* (Paris, 1872)
- (20) 注 11 参照。
- (21) A. Galanopoulos & E. Bacon, *Atlantis. The Truth Behind the Legend* (London, 1969)
- (22) J. Luce, *The End of Atlantis: New Light on an Old Legend* (London, 1969)
- (23) V. LaMarche & K. Hirschboech, 'Frost rings in trees as records of major volcanic eruptions,' *Nature* 307/1 (1984), pp.121-6.
- (24) H. Clausen et.al., 'A comparison of the volcanic records over the past 4000 years from the Greenland Ice Core Project and DYE 3 Greenland ice cores,' *Journal of Geophysical Research* 102 (C-12) (1997), pp.26, 707-26, 723.
- (25) K. Pang et.al., 'Climatic and hydrologic extremes in early Chinese history: possible causes and dates,' *Eos* 70 (1989), p.1095.
- (26) ツァンガー前掲書, 153 ページ。